

CAMPUS 八戸学院

vol.64

八戸学院大学創立40周年記念講演
夢を持って大学生活を

八戸学院 星の子シアター ノアの方舟

八戸学院大学創立 40 周年記念講演 夢を持って大学生生活を



また、同日行われた教職員対象の講演では、「温故知新」と題し、私立大学が置かれている現状を踏まえ、高大連携による Early Start プログラム（大学教育早期開始）について説明されました。このことは、私学が生き残っていくためのヒントとなりました。



学校法人玉川学園の理事長であり、日本私立大学協会会長の小原芳明氏による講演が行われ、約千人の学生が聴講しました。
「飲水思源」と題した講演では、大学進学へのメリットなどを挙げ、大学に進学させてくれた親に感謝を忘れず、大学卒業後も言語能力や論理的思考力を高める学習を続けることが必要であると語られました。そして最後に「夢を持って、大学生活を送ってほしい」とエールをいただきました。

CONTENTS

- 3 八戸学院大学創立 40 周年記念講演
夢を持って大学生生活を
- 4 八戸学院大学『SDGs』の取り組み
- 6 行政機関×高等教育機関 八戸市
- 8 研究室訪問
「八戸学院大学 別科助産専攻開設」-助産教育の今昔-
- 10 八戸学院 星の子シアター ノアの方舟
- 12 八戸学院 TOPICS
- 14 ステラが行く
- 15 ステラ・フォーカス
- 16 イノベーション報告
- 18 理事長散策

CAMPUS 八戸学院

vol.64



表紙

秋も深まり、美保野キャンパスの木々の葉が落ちたころ、1本の紅葉がエンジ色（八戸学院カラー）の葉をたくさん付けて、学生たちを見守っています。

建学の精神
「神を敬し、人を愛する」
カトリックの精神に則る道徳教育を施し、高尚なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することをもって目的とする。（寄附行為 第3条）

八戸学院光星高等学校同窓会 第60回記念総会で学校法人光星学院に寄付

4年度 第60回 八戸学院光星高等学校同窓会



法官新一理事長に目録を手渡す安井同窓会長



第60回を記念して作成された記念誌と記念メダル

- 八戸学院大学
TEL 0178-25-2711
- 八戸学院大学短期大学部
TEL 0178-25-4411
- 八戸学院地域連携研究センター
TEL 0178-25-2789
- 八戸学院図書館
TEL 0178-30-1695
- 八戸学院光星高等学校
TEL 0178-33-4151
- 八戸学院野辺地西高等学校
TEL 0175-64-4166
- 八戸学院幼稚園
TEL 0178-34-5765
- 八戸学院聖アンナ幼稚園
TEL 0178-45-3670
- 八戸学院第二しのめ幼稚園
TEL 0178-25-2488

<https://kosei.hachinohe-u.ac.jp/>

高校生との連携

八戸高校探究学習における発表と
 本学教員によるコメント
 (2021年10月7日、2022年10月6日・13日)

本学において、八戸高校の生徒が授業の一環としてSDGsに関わる探究学習の成果を報告し、それに対して本学教員がコメントを加えました。



八戸水産高校と海岸でのゴミ拾い
 (2022年6月～8月)

★SDGs【目標14:海の豊かさを守ろう】
 八戸水産高校が主催し、鯨観光協会と地域経営学科が協賛して活動を実施したもので、地域経営学科のゼミ生が高校生と一緒に燕鳥神社近辺の海岸の清掃を行いました。



第3回「八戸SDGsフォーラム」(2023年3月12日予定)
 地域経営学科主催の第3回「八戸SDGsフォーラム」を、2023年3月12日にポータルミュージアムはっちで開催予定です。

第1回「八戸SDGsフォーラム」
 (2021年1月27日～2月3日)

地域経営学科主催の「八戸SDGsフォーラム」を、八戸ポータルミュージアムはっちにて開催しました。

SDGsとは何か、世界レベルの問題に対して、地域レベルでできることは何か、八戸が持続可能な都市になっていくためにはどうしたらよいかなど、地域経済に関する新聞記事や八戸港の取り組みなどの話題提供をもとに、地域の皆さんと考えました。

また、八戸市内の4つの高校(八戸高校、八戸水産高校、八戸聖ウルスラ学院高校、八戸工業大学第二高校)からは、SDGsに関する研究活動成果が発表されました。SDGsの目標を身近な地域課題と接続させて、高校生ならではの視点で自分たちができることを考えて行動した成果は、多くの市民に勇気を与えました。1週間ギャラリーに展示されたポスターに多くの応援メッセージが記されました。

地域経営学科として、地域の大学として、今後もSDGsや持続可能な地域について考え続けていくために、継続的に今回のようなフォーラムを実施していきます。

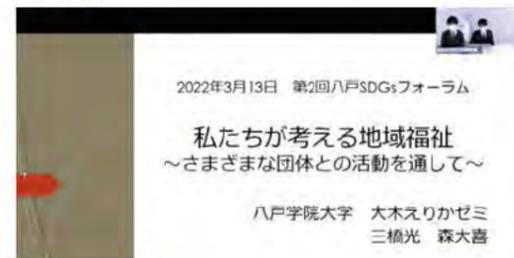
第2回「八戸SDGsフォーラム」
 (2022年3月13日)

地域経営学科主催の第2回「八戸SDGsフォーラム」が八戸市美術館2階にある「八戸学院まちなかラボ」で開催され、国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)をテーマとした本学教員の講演や学生の発表、および三八地域の高校生(八戸高校、八戸北高校、八戸東高校、光星高校、工大二高、三戸高校)による発表が行われました。

本学看護学科教員の講演では、看護の技術がSDGs達成に大きくかかわっていることが紹介されました。学生の発表では、法律・食料経済・社会福祉を学ぶゼミナールが参加し、それぞれの視点からSDGsと関連する諸課題について議論しました。

高校生による発表では、オンラインで参加した6つの高校から10チームが、環境保全や貧困削減、まちづくりといった側面からSDGsの達成に求められる取り組みを紹介しました。

今後も地域経営学科を中心として、SDGsに関する教育・研究活動を一層推進していくとともに、その成果を地域社会へと還元し、持続可能な地元・八戸の実現に貢献していきます。



SDGsに関わる出前講座
 SDGsに関わる探究学習の指導として、三八地区・上十三地区の多数の高校に出前講座を行っています。

地域社会との連携

本学ゼミ生の報告のパネル展示
 (2022年10月5日～10日)

地域経営学科とイオンモール下田との共催で、第2回「八戸SDGsフォーラム」で発表した内容をパネルにして展示しました。地域の方々にSDGsがどのようなものであるかを知っていただく機会となりました。



新郷村との森林伐採
 (2022年8月26日)

★SDGs【目標15:陸の豊かさを守ろう】
 地域経営学科の学生が、新郷村役場、三八地方森林組合、新郷村木の駅プロジェクトの実行委員会の会員の方々とともに、山村地域における森林・林業の体験や木の駅プロジェクト活動の知見を通して、地域における森林・林業の役割を学習しました。



高校教員との連携

「高校の探究学習とSDGsシンポジウム」
 (2021年11月19日・2022年10月28日)

八戸学院大学は高校の新学習指導要領の開始の前に、探究学習の体系的な取り組み方法に課題を感じている高校の先生方に対して、SDGsを軸にした探究学習の情報提供・意見交換の場として、シンポジウムを開催しました。



SDGsは、2015年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられ、2030年を達成年限とし、17の目標と169のターゲットから構成されています。

八戸学院大学には、地域経営学部 地域経営学科の他に、健康医療学部 人間健康学科・看護学科があります。この2学部3学科で、SDGsの17の目標のうち、とりわけ「3. すべての人に健康と福祉を」、「5. ジェンダー平等を実現しよう」、「10. 人や国の不平等をなくそう」、「11. 住み続けられるまちづくりを」、「12. つくる責任つかう責任」、「14. 海の豊かさを守ろう」、「15. 陸の豊かさを守ろう」の7つの目標に特に力を入れています。

地域経営学科は「持続可能な(まちづくり)」を応援する学科をコンセプトにしています。このコンセプトはSDGsの理念とも合致しており、このコンセプトのもとで、SDGs(持続可能な開発目標)に対応したカリキュラムを開設しています。座学の講義以外にも地域社会に飛び出て、「地域は学びの場」をモットーに、様々なフィールドワーク科目やインターンシップを通じて、地域社会の人々とともに、学生に地域課題を理解させ、その課題の解決能力を育んでもらうことに努めています。



地域経営学部地域経営学科 学科長・教授 高須則行

「持続可能な(まちづくり)」



八戸市では、八戸学院大学並びに八戸学院大学短期大学部をはじめとする地域の高等教育機関と連携しながら、地域の活性化と持続的な発展のための取組を推進しています。

平成21年9月には、地域が有する政策課題等について専門性の高い調査研究活動や提言を行うことを目的に、八戸学院大学、八戸工業大学、八戸工業高等専門学校、八戸版シンクタンクとして「八戸市都市研究検討会」を設置し、単年度ごとにテーマを設定して取り組んでいます。昨年度までに取り組んだ研究テーマは、地域資源を活かした魅力ある観光創造、若者の地域定着とU・I・Jターン可能なまちづくり、アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化など

13のテーマにのほり、その成果を市の様々な施策に反映してきました。

平成30年7月には、八戸学院大学、八戸学院大学短期大学部、八戸工業大学及び八戸工業高等専門学校の4つの市内高等教育機関と八戸商工会議所及び本市とで、相互の密接な連携と協力により、産学官が一体となり特色ある地方創生に取り組むことで、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、地域社会の持続的発展と地域の活性化を図ることを目的とした包括連携協定を締結するとともに、その目的を実現するために「八戸産学官連携推進会議」を立ち上げました。この会議では、近年全国的に課題となっている地方の私立大学の定員割れや学校運営の破綻等を踏まえ、当地域の高等教育機関の今後のあ

八戸市



市長 熊谷 雄一

昭和37年生まれ(八戸市出身)
 昭和60年 日本大学法学部政治経済学科卒業
 平成13年 八戸市議会議員(1期)
 平成15年 青森県議会議員(5期)
 平成23年 東日本大震災対策特別委員会委員長
 平成27年 議会運営委員会委員長
 平成29年 青森県議会議員
 令和3年 11月17日八戸市長に就任(現在1期目)

り方や地域振興策を検討するとともに、少子高齢化や地域外への若者の流出による人口減少をはじめとする地域課題の解決に向けて産学官が一体となって取り組んでおり、令和2年3月には長期的な目標として、2045年に15歳から29歳までの若者人口の増減数を均衡させることを掲げた「産学官連携による八戸未来創造中長期計画」を策定し、多様な世代が持続的に生活できるまちづくりを推進しています。

さらに、同会議の新たな取組として、今年度から4校共通の講義である「八戸地域学」を創設しました。これは地域の歴史や文化、産業等を学び、地域への理解や愛着の醸成を図ることにより若者の地元定着につなげていくことを目指すものであ

いたほか、会場では、広く市民の方々にも聴講していただきました。今後も八戸地域を知る学びの場として、様々なテーマにより展開していきたいと考えています。

令和2年9月には、当市と近隣7町村で構成する八戸圏域連携中核都市圏において、地場産品の販路拡大と関係人口の創出を目指すとともに、観光誘客や移住・定住等を促進するため、首都圏の交流拠点として東京都内に「八戸都市圏交流プラザ8base(エイトベース)」を設置し圏域の総合的なプロモーションを行っています。八戸学院大学には、8baseを活用して八戸圏域の地場産品のマーケティング戦略を「エイトベースプロジェクト」を展開していただいております。



新美術館で開催された短大の佐貫准教授によるアートの学び

ます。当プロジェクトでは、学生が地元企業の商品開発などについて事前学習を行った上で、実際に8baseの店頭で立ち地場産品のPRやアンケート調査等のフィールドワークを実施し、これらを通じて、地場産品の販路拡大による地元企業の振興はもとより、学生の地元への理解と愛着の醸成や、将来の圏域を担う人材の育成に努めていただいております。

また、当市では、昨年11月に新美術館を開館しましたが、八戸学院大学及び同大学短期大学部には、美術館の2階にサテライトキャンパス「八戸学院まちなかラボ」を設置していただいております。本美術館は「種を蒔き、人を育み、10年後の八戸を創造する美術館」をコンセプトに、美術品展示に留まらず、市民とともにアートを介して出会う学びを誘発する様々なプロジェクトを展開することにより、人々の感性や創造力を育み、まちや暮らしをより豊かにしていくことを目指したこれまでにない新しいタイプの美術館であり、両校には、同ラボを拠点として、大学が有する専門性と美術館が有するアートの専門性を融合させ、新たな価値や活動を生み出すための多様な取組を展開していただいております。今年度は、企画展と連動した「創作体験ワークショップ」や学生と社会人が一緒にフィールドワーク等を行う「学生×社会人のアート



新美術館で開催された短大の池田准教授によるワークショップ

の学び実践講座」の開催、さらには保育士を目指す学生の皆さんが運営する無料託児スペースの開設など、本美術館の特徴である「アートの学び」の充実や、子育て世代が気軽に来館できる機会の創出に取り組んでいただいております。

現在、地方を取り巻く環境は、人口減少・少子高齢化の進行やグローバル化の進展に加え、新型コロナウイルス感染症の流行やデジタル化の進展、グリーン社会の実現に向けた動きの加速化など、これまでになく大きく変容しています。このような中で地域社会の持続的発展を図っていくためには、行政と高等教育機関が連携して地域課題の解決に向けて取り組んでいくことが極めて重要であると認識しています。

り、10月に開講した第1回講義では、私が講師を務め、「八戸市の魅力・活力・市民力」と題して当市が持つ大きなポテンシャルとそれらを高めるための取組について講義しました。市内高等教育機関の学生の皆さんには動画で受講していただ



学生が参加したエイトベースプロジェクト

八戸学院大学及び八戸学院大学短期大学部は、開学以来、地域経済やスポーツ、保健医療、福祉等、幅広い面で地域の発展を支えてきた知の拠点であり、豊かな教養の習得や人間性を養う教育の場であるだけでなく、学生が集まることによる地域の賑わい創出と地域経済の発展という点でも、非常に重要な役割を担っていただいております。

八戸学院大学及び八戸学院大学短期大学部の皆様には、引き続き地域に根ざした高等教育機関として、学生への多様な就業機会の提供や現代社会が求める有為な人材の育成、さらには専門的知見及び研究成果等を活用した地域貢献により、当地域における地方創生の中核を担っていただくことを大いに期待するとともに、今後とも市政へのより一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



幼児保育科の学生による無料託児スペース

| 科目区分 | 1年次/1セメスター 春学期 | 1年次/2セメスター 秋学期 |
|-------|--|---------------------------------------|
| 助産の基礎 | 助産学概論① ウイメンズヘルスケア② 母子の心理・社会学① 基礎周産期学① | 生殖と生命倫理① |
| | 健康教育技法② | プレコンセプションケア① |
| | 助産診断学Ⅰ(助産過程)① 助産診断学Ⅱ(妊婦のケア)① 助産診断学Ⅲ(産婦のケア)② 助産診断学Ⅳ(褥瘡のケア)① 助産診断学Ⅴ(新生児・乳幼児のケア)① | 胎産期救急とケア① |
| 助産の統合 | 地域母子保健Ⅰ(概論)① 助産管理(概論)① 助産管理Ⅱ(助産業務の管理)① | 地域母子保健Ⅱ(保健活動の実践)① |
| | 臨床実習Ⅰ(妊産期・産後)① 臨床実習Ⅱ(ハイリスク事例)① | 臨床実習Ⅲ(分娩期・産後)② 臨床実習Ⅳ(助産管理・地域母子保健)② |
| 助産学実習 | 臨床実習Ⅴ(ハイリスク事例)① | 臨床実習Ⅵ(分娩期・産後)② |
| | 臨床実習Ⅶ(ハイリスク事例)① | 臨床実習Ⅷ(分娩期・産後)② |
| 研究 | 助産学研究② | |

表3 別科助産専攻カリキュラム



助産師1年目(病院の中庭)

命は胎内で育ち神業のような分娩メカニズムで誕生する。これは人知を超えた大きな傘下にあるといえる。その偉大な母の生命力に畏敬の念をもち、助産師として「愛」を最大限に捧げなければならぬ。助産師を目指す者は、このことを意識し、自分の心を磨き、しっかりと学ぶことで「神を敬し人を愛す」の建学の精神を成し遂げることになる。また、助産師としての活動は院内にとどまらず地域社会の多くの場を求められており、専門職としての業を広く貢献できる職業であり、これは学校法人光星学院の創設者、中村由太郎先生の「実学をもって地域に貢献す」に通じるものである。八戸学院大学「別科助産専攻」は、建学の精神に基づき、あらゆるライフステージ、場、背景などの母子に対応できる基礎を学び、地元に着目し自己研鑽の継続を惜しまない助産師の育成を目指し、令和5年4月にスタートする。そして、学生は卒業後も定期的に集い、同窓生同士が励まし合い情報交換できるキャンパスにしたいと考えている。

「八戸学院大学 別科助産専攻開設」 — 助産師教育の今昔 —



八戸学院大学
健康医療学部看護学科 学科長
高橋 雪子

秋田大学大学院教育学研究科学校教育専攻
2009年4月から八戸短期大学に勤務
2016年4月から八戸学院大学看護学科に勤務
2020年から現職

担当科目 看護学概論、母性看護学概論、
健康医療総論、卒業研究
性に関する講演・講座多数

令和5年4月から、別科助産専攻を開設することになった。定員は4名で、一年コースの助産師養成教育課程である。その準備に取り掛かった昨年の秋から私の研究室は、助産師教育関連の情報が集まる場となった。本稿では、まず助産師教育の背景を紹介し、次に私が助産師学校時代に出会った性・セクシュアリティ教育を通じて別科助産専攻を紹介したい。

■助産師教育の変遷

わが国における助産師教育は、1874(明治7)年8月に発布された医制で産婆に関する規定が示されたことに始まる。(表1)

現在、助産師になるには表2に示すようなコースがある。(表2)

2021年の全国の助産師教育課程は214校(221学科)で、大学院44校、大学130校(別科11校含む)、短大専門学校40校となっている。青森県では、弘前大学、青森県立保健大学および青森中央学院大学別科と、いずれも津軽地域に開設されている。本学の別科助産専攻は、県南では初めての青森県4番目の助産師教育課程となる。青森県の助産師数は、2018年337人で人口

10万人あたり26.7人と全国ワースト1位だった。2020年は336人で人口10万人あたり27.1人と微増しているものの、なおも就業先が偏在しており現場の不足感は大い。

■母子が置かれている状況の変化

加速する少子化、高度化する周産期医療、ハイリスク妊娠・出産の増加、核家族化や女性の社会進出など、周産期をめぐる環境は、出産後の女性が抱える育児不安や困難感の問題を深刻化させている。そのことは、望まない妊娠、未受診妊婦、産後うつ、DV、被害者の母親、母親の自殺など様々な問題を抱える妊産婦の支援の必要性をますます高めている。それゆえ助産師には、医療機関でのコアとなるケアだけでなく、地域における妊娠期から子育て期までの継続したケアの習得が期待される。さらに、若者が将来の妊娠を考えたから生活や健康と向き合うケアや、多様な文化・価値観・性の多様性を考慮したケアも求められている。

■別科助産専攻のカリキュラム

こういった背景をもとに2020年、保健師助産師看護師学校養成所指定規

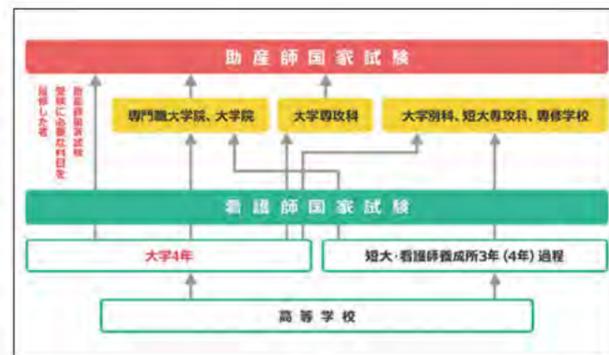


表2

助産師教育の変遷

- 1899(明治32)年 産婆規則の公布、産婆試験規則の公布
その後、各地で産婆養成所が開校された。
- 1947(昭和22)年 産婆の名称が助産師になった。
看護師教育後に助産師教育が行われ、国家試験に合格した者に助産師免許授与
- 1949(昭和24)年 保健師助産師看護師学校養成所指定規則によるカリキュラムが20年間続く
第一次カリキュラム改正
- 1971(昭和46)年 助産師が助産師に名称変更
- 2002(平成14)年 修業年限6か月以上が1年以上に変更
- 2006(令和元)年 その後、看護教育が大学教育として行われるようになると、助産師教育も大学教育の中で実施されるようになった。

表1

および「助産の研究」の5つに区分し、助産の実践に必要な基本的知識・技術に加え、女性のライフサイクル各期における健康支援を行う「ウイメンズヘルスケア」若年者に妊娠前から健康管理支援を行う「プレコンセプションケア」、生殖補助医療に関する「生殖と生命倫理」などの科目を盛り込んでいる。(表3)

■私の助産師学校時代

私の助産師学校はキリスト教精神に基づく教育方針の「聖バルナバ助産学院」(大阪市)で、春学期30名、秋学期30名が入学する二期制であり、半年は先輩がいて半年は後輩がいるという恵まれた環境だった。実習場所である聖バルナバ病院の分娩件数は年間3000件以上だったため60名の実習生を迎えることができた。聖バルナバ病院にはチャペルがあり、助産師学生は毎朝講義の前に集合し「主の祈り」

■性教育との出会い

聖バルナバ病院では日本でいち早く「思春期教室」が開催され、多くの高校生や大学生が受講していた。チャペルに集合してオリエンテーションを受け、院内の診察室や病室、分娩室、新生児室などを見学後、チャペルに戻り講義を受ける。ついさつき分娩した方の胎盤や臍帯を希望者は触ることができ(現在はしていない)、当時としては刺激的で画期的な性教育であった。私の性教育に関わる活動はそこから始まった。

■秋田市FMラジオで2年間のMC

性教育活動を続ける中、10年間住んだ秋田市においてコミュニティFMラジオ番組を2年間担当した(八戸BeFMに相当)。「セクシュアリティからのメッセージ」という番組で、恋愛・結婚・避妊・妊娠・産後・買春・ビル・コンドームなどに關する多くのテーマを取り上げ、リスナーからのメッセージを紹介し、時に学生をゲストとしてトークを行った。公共電波を使った性に関するメッセージ番組は、月に1回60分の番組から週に1回30分の番組となり、20年前の秋田市にとっては思い切った企画だったと今では思う。

■助産師の役割の一つ

すべての人間にとって共通することの一つに、「胎児」の経験がある。生殖医療が発達し、これまでになかった新しい技術で命が誕生している中であっても、人間の命は「子宮」という胎内で育っている。今年の7月公開された「ジュラシック・ワールド/新たな支配者」では、前作においてクローン人間として紹介された「メイジー・ロップ

クウッド」のその後が描かれていた。彼女は、遺伝子操作を受けていたが母親の胎内で育ち出産されたことが判明し、内心「ほっとした自分」がいた。胎内では温かな羊水と粘膜に包まれ母親の大動脈音や腸雑音、周囲の語りかけ等が聞こえる。心地よい羊水・粘膜の接触に加え様々なサウンドが子守歌となり、胎児に「刺激と快感」を与えてくれる。その安全な環境が保障されるためにも母親の健康・生活環境は重要であり、だからこそ専門家の支援が妊娠前から必要になる。助産師が果たすべき大事な役割の一つはそこにある。

■八戸学院大学ならではの助産師教育

命は胎内で育ち神業のような分娩メカニズムで誕生する。これは人知を超えた大きな傘下にあるといえる。その偉大な母の生命力に畏敬の念をもち、助産師として「愛」を最大限に捧げなければならぬ。助産師を目指す者は、このことを意識し、自分の心を磨き、しっかりと学ぶことで「神を敬し人を愛す」の建学の精神を成し遂げることになる。また、助産師としての活動は院内にとどまらず地域社会の多くの場を求められており、専門職としての業を広く貢献できる職業であり、これは学校法人光星学院の創設者、中村由太郎先生の「実学をもって地域に貢献す」に通じるものである。八戸学院大学「別科助産専攻」は、建学の精神に基づき、あらゆるライフステージ、場、背景などの母子に対応できる基礎を学び、地元に着目し自己研鑽の継続を惜しまない助産師の育成を目指し、令和5年4月にスタートする。そして、学生は卒業後も定期的に集い、同窓生同士が励まし合い情報交換できるキャンパスにしたいと考えている。



八戸学院 星の子シアター

ノアの方舟 はこぶね



ハンドベルの披露も



荒く激しく吹く風や雨



元気いっぱいヒツジヤクマ



卵からヒナがかえる瞬間



エンディングではみんなで歌を



鳩を飛ばし、陸を見つけた



ライオンやニワトリも



大きな動物は短大生と一緒に

※昭和56年に光星学院の幼稚園による「第1回光星学院付属幼稚園音楽発表会」が開催され、名称や内容を変更しながら回を重ねてきました。近年では、幼児保育学科の学生も参加するようになり、令和の時代を迎えた今、「星の子シアター」と命名して、全員で一つのリトミック表現の舞台を作り上げました。

令和4年11月9日（木）八戸市公会堂にて、八戸学院大学短期大学部と八戸学院の3つの幼稚園による音楽会が開催され、学生と子どもたちが心を一つにして新たな歴史の1ページを彩りました。

野西高 野辺地町の魅力を発信～第32回全国産業教育フェア～ [10/15・16]

「全国産業教育フェア」が青森県内で初めて開催され、全校生徒が参加しました。

展示ブースでは「常夜燈」のミニチュアや、3年次生の総合的な探求の時間で作成した「縄文遺跡群体験ツアー」の冊子を展示。ガイドを務めた生徒が熱心に説明し、特産品、町の名勝地や北前船など野辺地町の歴史を知ってもらう機会となりました。地元地域魅力体験・紹介のコーナーでは、野辺地町の老舗菓子店舗「大湊屋製菓」に協賛頂いて作成した、「野辺地西高校オリジナルどら焼き」を販売。販売担当の生徒たちは、ブースを訪れたお客さんに笑顔で対応し、瞬く間に完売しました。青森魅力発信ツアープログラムでは、「常夜燈公園LIVE」をメイン会場のマダアリーナとオンラインでつなぎ、ライブで全国の高校生に野辺地町の魅力を発信して、好評を得ました。

※「全国産業教育フェア」は農業・工業・商業・水産・家庭・情報・看護・福祉・総合・特別支援で産業教育を学ぶ高校生の日頃の学習成果を発表する場です。



光星高 第2回「光星(キラ)リンピック」開催 [10/12]



光星高校のスポーツ大会「光星(キラ)リンピック」が、八戸市立屋内スケート場YSアリーナと八戸市体育館で開かれ、全校生徒約880人が様々な競技に汗を流しました。このスポーツ大会は、公共施設の積極活用および教育活動を通して地域を盛り上げようと、昨年から実施しています。YSアリーナではサッカーやバレーボール、将棋囲碁、eスポーツ、八戸市体育館ではバスケットボールやバドミントンをそれぞれ実施。生徒は力いっぱい競技に打ち込み、白熱したゲームを展開。競技の合間には、スケートリンクで自由滑走も楽しみました。



光星高 演題は『ネバーギブアップ生きる喜びを歌う』 [11/8]

盲目のシンガソングライター 板橋かずゆき氏(むつ市出身)の講演会を実施しました。冒頭、盲目になった経緯の説明と盲目になって気づいたことが話されました。その一つとして、自分と音楽との出会いが自分を幸せにしてくれたということ。なぜならば音楽は自由であることに気づいたから。そして、その音楽を通して自分のできること、他人のためにやれることがわかったということでした。そこから一挙に生徒の心を掴み、本校硬式野球部応援曲である「だいじょうぶ」を含め6曲を熱唱し、含蓄のある歌詞と歌と歌の間のお話も心のこもった奥深い内容でした。この講演と歌は本校生徒にとって貴重で意義深く、「生きることの喜び」を考える絶好の機会となりました。



大学 短大 はちがくフェス「煌星～光を繋いで～」を開催! [10/23・24]



大学 光星高 中日ドラゴンズとソフトバンクホークスから指名、夢の舞台へ挑戦! [10/20]

プロ野球ドラフト会議で、八戸学院大学の松山晋也選手(投手)が中日ドラゴンズ、光星高校の佐藤航太選手(外野手)がソフトバンクホークスから育成枠の指名を受けました。

指名を受けた松山選手は「気迫あるピッチングで活躍したい」、佐藤選手は「いち早く支配下登録されるような選手になりたい」と抱負を語りました。



八戸学院聖アンナ幼稚園

八学短大 池田准教授による造形 in 美術館

10月の「造形のお庭」の会場は八戸市美術館。初めて美術館に来たという子どもも多く、ちょっぴりドキドキしながら学芸員さんの話を聞きました。鑑賞するときのお約束をして、いざ館内めぐりに出発!!



始めに八戸に因んだ絵を見た子どもたちは、表現の方法により様々な蕪島があることに驚いた様子でした。

次は「マジックランタン」という不思議な光の写真を見て、好きな作品をその場で写生しました。

最後に、館内にある「八戸学院まちなカラボ」で仕上げの色塗りをすると、「楽しかったね、また来たい!」と、みんな目を輝かせていました。



八戸学院第二しののめ幼稚園

家庭教育学級「親子スケート教室」

「氷都八戸で「氷上遊び」に親しむ」

秋風が日に日に冷たく感じるようになってきましたが、園庭で遊ぶ子どもたちの姿からその寒さは感じません。白夜の続く北欧では、春から夏の終わりにかけて、老若男女問わず誰もが太陽の光を浴びようと屋外での活動を楽しまれます。ここ東北でも春から秋の晴れた日は、子どもたちにとって「外遊び日和」です。秋晴れのある日の朝の会、「お外で遊びたい!」と元気な声が職員室まで聞こえてきました。積雪寒冷期間の長い北日本では、その間の活動量・運動量が、他の地域と比べると減少することは「ご存じの通りです。1年のうち4〜5ヶ月間、毎年外で遊ぶ機会が減る(活動量・運動量減少)ことが、子どもの健康に与える影響は少なくないでしょう。

今秋、年齢的には少し早いと思いましたが、子どもたちと冬の遊びを体験しようとして、初めての「親子スケート教室」を開催しました。第二しののめ幼稚園では、毎年、雪遊びやそり遊びを楽しんでいますが、これまで「氷上遊び」をしたことがありませんでした。幸い、系列大学には世界レベルで活躍したスケーターが数名おり、今回は八戸学院大学スピードスケート部の駒目監督に教えていただくことができました。



初めてYSアリーナのスケートリンクを見た子どもたちは、「ピカピカ光ってるよ」、「ツルツルするね」、「はじっこはざらざらしているよ」、「きれいだな」、「冷たいのに手が濡れないよ」などと氷を触りはじめ、その冷たさと感触を確かめていました。次第に、手だけではなく、お尻でツルツルを確かめつつ滑り始めま



す。そして、駒目先生の声掛けで、氷の上でうつつ伏せに寝て、保護者に両足を保持して押し出してもらおうと、体が氷の上を気持ちよく滑っていきます。「氷上ロケットだ!」と、子どもたちは大喜び! そのうち、子どもたちの楽しげな様子に、我慢していたお父さん、お母さんも同じようにロケット滑りを始め、氷の上ならではの遊びをみんなで楽しみました。

遊びで体が暖まったところで、いよいよスケート靴を履く時間がやってきました。初めてスケート靴を履く子どもたちも大勢いましたが、お父さんやお母さんと手をつなぎながら、スケート靴で地上を歩くことができました。すでにスケート経験のある子どもたちは、ひとりでスイスイと滑りはじめ、何年かぶりのスケートに、はじめは恐る恐る歩いていたお父さんやお母さんも、徐々に感覚を取り戻したようです。スケート初体験の子

どもたちは補助具につかまりながら、慎重な足取りでトコトコと氷上を歩いています。ここでも、自然と滑れる子どもや保護者が、初めて滑る子どもたちに声を掛けたり、リードしながら助けてくれます。徐々にそれぞれの方法で氷の上を滑れるようになったところ、コーナーを回ったり、直線コースを往復して滑ったり、みんなで滑走を楽しみました。

最後は、製氷車も入れて記念撮影。和気藹々とした雰囲気の中、誰も怪我することなく終えることができました。冬の間、氷都八戸に生まれ育つ子どもたちが運動不足に陥らないよう、存分に体を動かす。八戸の長い冬を健やかに過ごしてほしいと思います。

また、生涯にわたって、氷上での遊びやスケートに親しんでほしいと思います。



最後はみんなで記念撮影

八戸学院第二しののめ幼稚園

ちびっこ防災広場

八戸東消防署に行って、たくさんの体験をしてきました。

消防服やヘルメットを被り、消防士さんになりきって消火訓練! 的を狙って水を噴射しました。ホースはとっても重く、「消防士さんって力持ちなんだね」と、子どもたちも驚いた様子でした。

次は、はしご車体験! 救出するために、消防署の建物よりも高い所まで登ることがあることを知り、消防士を目指している子どもたちにとっても、刺激的な時間となりました。

そのほか、救急車に搭乗させていただき、実際に使っているものについて教えていただきました。

みんなを守るため、日々頑張ってくれている消防士さんの格好いい姿に、子どもたちの目も輝いていました。



八戸学院幼稚園

自然体験「ツリー・クライミング」

10月上旬の園外保育は、年少以上を対象に親子レクリエーションとして種差少年自然の家で行いました。当日は天候もよく、約300名の園児ならびに保護者の皆さんが参加し、いろいろな遊びにチャレンジしました。屋内ではクラフトや昔の遊びを、屋外では木の実や木の葉を集める自然散策、また樹高20メートルを超える樺の木を相手に木登り(ツリー・クライミング)も実施し、秋の自然を感じる体験ができました。

初めて登る大きな木に園児たちは、最初は恐る恐るの様子でしたが、慣れるとスルスルと登っていき、大きな枝の上に立ってポーズを決めたり、座って下を眺めたりと、思い思いに楽しんでいました。



今回は活動の難易度もあり年少の園児は見学になりましたが、お兄さんやお姉さんがチャレンジしている様子を興味深そうに眺めていたことから、来年はぜひ体験させたいと思っています。



例話から学ぶ

江戸時代に、あるお百姓さんの目が見えなくなってしまった話です。「目が見えなくなったら百姓は、隣国に名医がいると聞いて治療に出かけました。医者はすぐに手術をすることにしましたが、両目をくり抜くというやり方に、百姓は驚くのでした。医者が言うには、「くり抜いた目を焼酎で洗って乾かし入れてあげれば、元通りになる」と言うのでした。医者はくり抜いた二つの目を縁先で乾かしていると、犬が来て片方の目を食べてしまいました。困った医者は、目玉を食べた犬を捕まえて片方の目をくり抜き、素早く焼酎で洗って乾かし、百姓の目にはめ込んだのでした。医者が、百姓に治療後の目のことを聞くと、百姓は「よく見えるようになった」と答えました。ただ、「おかしいことに、自分のうんこが右の目には汚いものに見えるのですが、左の目にはおいしそうで食べてみたく見えるのです」と答えるのでした。」

この話は、江戸時代の心学道話「目玉で見ると、心で見ると」と題した話として紹介されています。江戸時代中期にこのころの用い方をわかりやすく民衆に説いた心学道話の一つです。何に見えるかはその人の心のあり方によって決まるということの教えです。良し悪し、善悪の間で生きる人間の心の持ち方の大切さをわかりやすく説いています。また、お金や地位、名誉などの欲望の世界だけ見ている人に、自分の目玉がどんな目玉かを知ることが大切

ということをユーモアに表現しています。

神話や昔話には、社会で真つ当に生きていくための教えがあります。私は生徒や学生の前に立って、例話を話す機会を持つようにしています。子どもたちの行いに、直接的にダメとか良いとか明確に指導する時もあります。時に心に染み入るような例話を読み聞かせるようにしています。例話には先人の教え、日本人の心、そして貧しくとも清く正しく美しく生きることの大切さを示唆しています。

いつの時代でも、若者の倫理観の弱さが非難されることがありますが、若者は人生における経験が乏しいわけですから当然と思います。しかし本当に反省すべきなのは、我々成人人なのではないだろうかと思ったりします。

教育のあり方が問われ、教員の姿勢が問われる今日、道徳教育のおざなりが、自立と放銃を混同し、機会の平等を結果の平等まで拡大して、行き過ぎた平等主義に片寄ったためではなかったらうか。若い人たちとともに倫理性や道徳性を高め、古来日本は貧しいが清潔な国だといわれてきた清潔性をより高めるために、いま生きていられるわれわれが前向きに取り組む努力をしなければならぬと思うのです。

また江戸時代のことですが、徳川家康、秀忠、家光の三代の將軍につかえた旗本で、大久保彦左衛門という人の話です。將軍の家光が家来の彦左衛門にたずね、部下の大久保彦左衛門が上



高大連携特別講義の様子

司の將軍様に答える話です。
「天下一の美味とはなんであろうか」
「塩でいいます」
家光はその意をはかりかねて質問します。すると彦左衛門は、「鯛であっても、塩がなくては食べられたものではありません。塩があればそれだけでも飯が食べられます」と答えます。そこで家光は、「それなら天下一の悪い味はなんだろうか」とたずねました。彦左衛門は、

「やはり塩でございます」と答えます。家光が不振に思っていたですと

「ほかのものならいくらでも食べられますが、塩はそうはいきません。一匙ほども食べることができません」と言います。家光がなるほどと思ったところへ、彦左衛門は追い打ちを加えるように言います。

「ほんとうに結構なものは、人の喜ばないものでございます。諫言も同じことです」
これを聞いて家光は、「わかった。これから以後、だれからの諫言も喜んで聞くことにしよう」

以上ですが、「人の喜ばないものこそ大事」という話です。普通、上司にはなかなか忠告や間違いの指摘がしにくいものですが、忠臣彦左衛門の比喩を交えたみごとな箴言に感心させられます。

もう一つ「毬に託された妻の志」という話も紹介しましょう。

「江戸中期、長州萩藩のお抱え医師で、滝鶴台という医事や仏籍に通じたりば人物がいました。若いとき藩士の娘が、「滝先生のような方なら、お嫁にいきたい」と言ったのを耳にして、鶴台はその娘を嫁にもらいました。娘は利発でしたが、顔は醜く、年ごろになってももらい手がなかったのです。しかし鶴台はそんなことはまったく気にしませんでした。娘が嫁に来てしばらくたったこ

ろのことでした。妻が立ち上がったとき、着物の袂から赤糸で巻いた毬がころがり落ちたのを見て、鶴台は妻に「お前、その年になってもまだ毬で遊んでいるのか」と言うと妻は次のように答えました。「私は、赤糸と白糸で二つの毬をつくり、邪念に取りつかれて愚かなことをしたときは、赤糸を巻き、逆によいことができたときは、白糸を巻いて自分の行いの証としております。日々の行いを反省し、後悔を少なくしようと心がけた結果、最近ではやっと同じくらいの大さきの毬になりました。これからは白毬をいっそう大きくしたいと思っております」

話に登場する鶴台は江戸で勉強をして、「海内無双の才人」と賞讃されたほどの人物でしたが、妻の志に胸を打たれるということから、夫婦愛の深さを説いていると解釈できます。

いつだったか、市内の焼き肉店に行くことがありました。ロボットが配膳しているのを目の当たりにして驚いたことがあります。注文の品を運んできたロボットへの対応に困ってしまう有様で、近未来の世界の中で孤立しているような感じがしました。見かねた隣席の若いカップルが、親切に対応を教えてくださいました。安堵して食事が出てきました。

こんな進歩した時代に、古くさいと思われるような「例話」を取り上げるのは、時代錯誤のような気もしますが、前にも述べた通り日本の先人たちの生活を通して、蓄えられた経験や知恵は

大切に受け継いでいく必要を感じます。時代が変わり人間の生活様式が変化しても、そこで生きてきた人々の心根は変わらない。例話にはそうした人の生きざまに対する反省や機知に富んだ話がたくさんあります。そしていかに幸せに生きるかという教えがあるように思います。悲しみにあつたとき、喜びに溢れるとき、それぞれのときに心を励ましてくれる話がいっぱいあります。

- 与えられた体への感謝
「中村久子という人、座古愛子から学ぶ」
- いのちを奪うことの罪深さ
「小林一茶と蛇の話」
- サソリの後悔
「イタチとサソリ、いのちをどう考える」(宮沢賢治)
- 涙は人のためだけに流しなさい
「井深八重、らい病の護身」
- 死に正面から立ち向かう
「スキーモーグル森徹のこと」
- 自分の影に学ぶ：青砥藤綱
「落とした銭10文を50文かけて探す」
- 後醍醐天皇の
「訓戒十二ヶ条」
- 目玉で見ると、心で見ると
「江戸時代・心学道話」
- 徳川吉宗の座右の銘六ヶ条
- 歴史を変えた命乞い(池澤尼)
- 寝巻姿で明治天皇を守る(山岡鉄舟)
- 稲むらの火(名主浜口五兵衛)
- 夫の頭をなぐる(松平定綱の妻)
- ほうびの炭火(西郷隆盛)
- いのちより大切な妻の種(伊予の作兵衛)



武道(弓道)の講義の様子

※文中の引用は、「日本例話大全書」による

他



八戸学院野辺地西高等学校 常夜燈



常夜燈（実物）

野辺地町のシンボルと言われている「常夜燈」は、町指定史跡で、国内に現存する石造りの物の中でも極めて古い常夜燈と言われています。

写真は、産業技術系列の生徒を中心に、原寸の2分の1の大きさで製作されたものです。

素材はウレタンで、石の質感をはじめ、細部にこだわり、約3ヶ月をかけて完成させました。

完成した作品は、「第32回全国産業教育フェア青森大会」で展示され、精巧な出来栄えに沢山の方が足を止めて見入っていました。

八戸学院野辺地西高等学校

